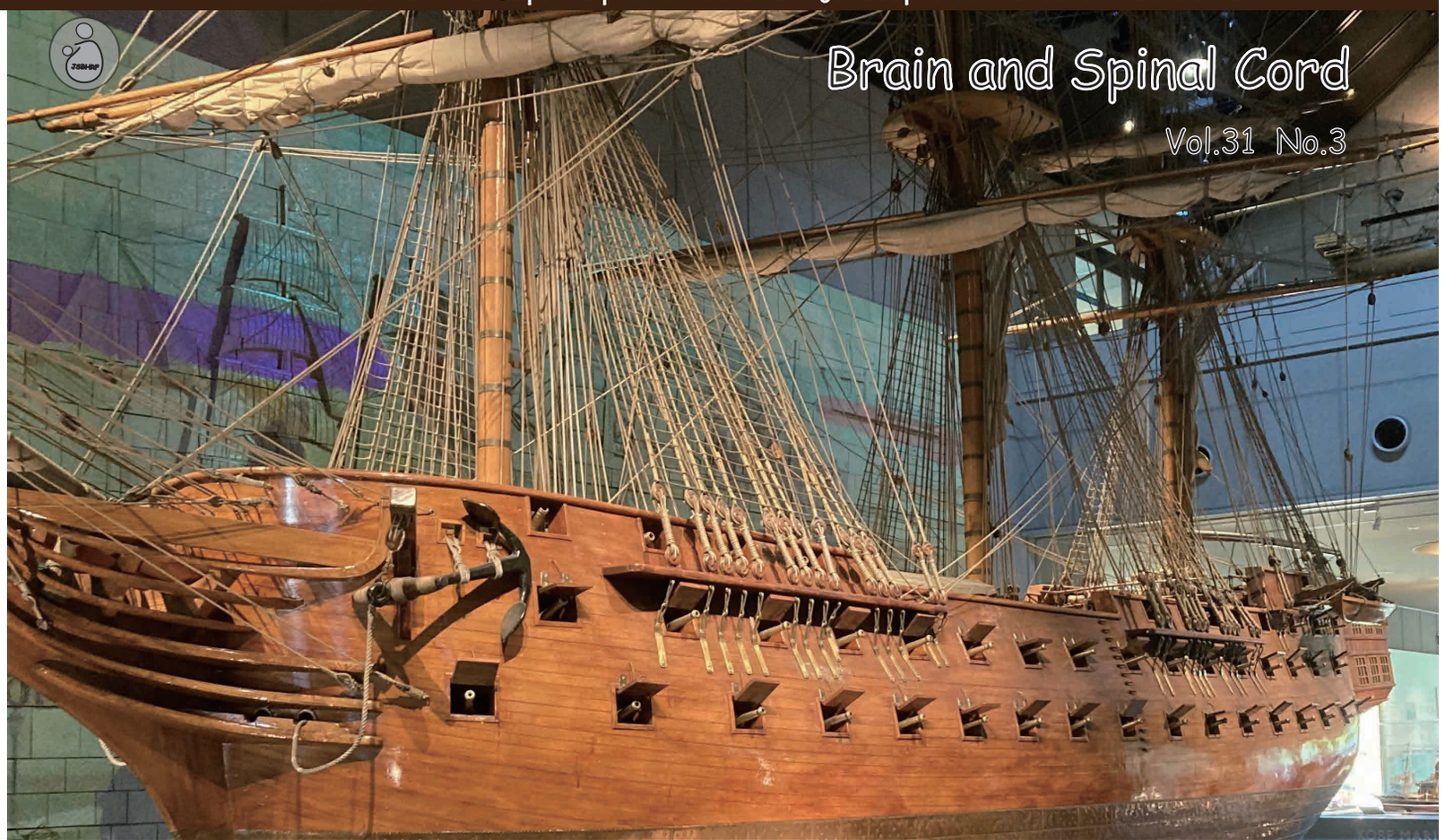
The Publication of the Japan Spina Bifida and Hydrocephalus Research Foundation



The publication of the Japan Spina Bifida and Hydrocephalus Research Foundation “B & C” Vol. 31 No.3 September 2024

巻頭言

太陽の光が痛いと感じられるほど猛烈に暑い夏を、皆様が無事に過ごされたことを祈っております。先週発災した能登半島の水害被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。直前に大学生の孫がボランティア活動で訪れた小学校の周囲が水没している映像を目にして、地震と水害に続けざまに襲われた方々の絶望が思われ、国を挙げての支援による早急な復旧を祈るのみです。

この度は、佐野のぞみ様から「小児神経科医の娘からみた父・松本 悟」の寄稿をいただきました。幼少のころ、そして小児神経科医になられてのちに松本先生から受け取られたメッセージをお聞かせいただけることは貴重です。シカゴ時代には、いつも病院に詰めておられた松本先生に電話で話をしていたこと、そしてその電話によく付き合ってくれたという心暖まるエピソードは初めて聞きました。私たち脳外科教室員の間では、「シカゴではほとんど病院に泊まり込んでおられたそうだ」という伝説がありましたので、電話で幼いお嬢さんと話をするのを楽しみにしておられたご様子にほっとしました。80歳代になっても患者さんの最後に立ち会うために、夜中にもかかわらず病院に駆け付けたエピソードは、それこそ松本先生と思えました。

そして、８０歳を過ぎての知覧訪問は胸を打ちます。江田島の旧海軍兵学校をやはり言葉少なく訪ねられたのは2007年3月31日、80歳のことです。戦後61年、それだけの年月を要しました。海軍兵学校の最終卒業生として18歳で経験した敗戦の上に、その後の人生を築くことを重く受けとめられたのでしょう。私も耳にした「負ける戦争はしてはいけない」という言葉には真実があります。

神戸大学医学部の同学年で男子学生であったものは、同窓会でよく松本先生が恐かった話をします。しかし、私はそのように思ったことは一度もなく、合理的・論理的で人間としての上品さ（decency）とともにとびぬけて高い知性を感じさせる先生でした。もっとも、脳神経外科に入局したのは私一人だけでしたので、私が変わっていたのかもしれません。長男が生まれた次の正月にご自宅にお招きいただいたことがありました。教室の先生方と一緒におせち料理をいただく中で、50歳代半ばの畏敬される教授であった松本先生が、「パパ」と呼ばれて奥様の指示に従っておられるのを目にして、「脳外科医はかくあるべし」と言ったのは妻でした。四六時中病院に詰める中で、お嬢さんからの電話を病院で楽しむ若い父親の延長にある、ご家庭での松本先生の姿でした。佐野のぞみ様、貴重なエピソードを本当にありがとうございました。

最後になりますが、1年越しで制作していた「二分背椎ハンドブック―背髄髄膜瘤」を発刊することができました。背髄髄膜瘤の赤ちゃんがお生まれになった時に、ご両親が最初に手に取る冊子を想定し、オリジナルの図を主にしてできるだけ簡潔な記述に努めました。この冊子のスタイル、内容について忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。ご意見を参考にさせていただきより良いものにしていけたらと存じます。

ようやく涼しくなる頃に、この号がお手元に届くことと存じます。皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

会長　長嶋 達也
（兵庫県立こども病院名誉院長）

“May I speak to Dr. Matsumoto?”

― 小児神経科医の娘からみた父・松本 悟 ―

佐野 のぞみ

医療法人童仁会池田病院 小児科
鹿児島市立病院 小児科

父の松本悟からは、「二分脊椎・水頭症の患者さん達に対して外科手術後の支援が神戸大学在職中までは十分にできなかったことが、日本二分脊椎・水頭症研究振興財団を立ち上げさせていただいたきっかけだった」と聞いていました。ご家族やご本人にとっては術後から色々な問題と向き合うことになり、各ライフステージで新たなチャレンジがある、そのことを常に思っていたのではないでしょうか。本稿では、財団のために尽力される医療関係者そして患者さまとご家族や支援者皆様方に、私が父から受け取ったメッセージや思い出を寄稿文で少しでも分かち合わせていただけたらと思います。

母が保存している写真の一枚に父の青年時代の写真があります。海軍兵学校の制服を身につけ一人凛とした佇まいで立っています。この写真が撮られたすぐ後に日本に原爆が投下され日本は降伏しました。その結果父は出征することもなく、職業軍人という道から大きく舵を切って、医師の道に進んだのです。

父に関して三つほど心に残っていることがあります。

一つは米国シカゴ時代の父が30代後半の頃の様子です。語学でもハンディがあったであろうと思いますが、小児脳外科医のレジデント（研修医）として昼夜仕事に打ち込む姿を見てきました。私が朝起床時には既に出勤しており、仕事帰りも遅く、土日も我々こどもが起きる時にはすでに家にはいませんでした。時折声が聞きたくなると、小学生の私は勤務先の病院に自分で電話して交換手に「May I speak to Dr. Matsumoto?」と電話口に呼び出してもらいました。父はこの電話にはよく付き合ってくれました。

父が80歳代になり、たまたま私が実家にいた時のことです。長年お付き合いのあった患者さんの最期であるとの連絡が家に入りました。夜中でしたが父はすぐ支度をして病院に出掛けていったのです。その時父の後ろ姿を見て「患者さんと父とではどちらが年上なのでしょう？」と思わずにはいられませんでした。80を過ぎてもシカゴの若いときと変わらない“医者魂”を持っていました。

二つ目の思い出は、父が40歳ごろで、家族でドイツのケルン市に一年半住んでいた頃の出来事です。この頃父がマックス・プランク研究所で神経病理の研究をしていた時期です。我々５人家族は家具の少ない殺風景なアパートに住んでいました（途中で弟が産まれて子供は４人になり６人家族となりました）。このアパートの上の階にはドイツ人のシングルマザーとそのティーネージャーの娘さんが住んでいました。時折家に帰ってくる息子さんもいました。娘さんとはよく一緒に遊び、そのお兄ちゃんも楽しいお兄ちゃんで、私たち日本人の子供とも遊んでくれました。ある時そのお兄ちゃんが帰って行った後に、我が家で唯一の高級品である日本製のカメラがなくなっていることが発覚しました。お兄ちゃんは自分の家を出て、どこかに行った後のことでした。その後、母親が我が家にやってきて「息子がカメラを持っていったようだ」と、謝りにこられました。私はドキドキしながら、父とその母親とのやりとりを見ていたのですが、意外な展開になりました。父はその母親に「息子さんがまた帰ってきたらこれを渡してあげて」と、少しばかりのお金を渡して、その一件は終わりました。

三つ目の思い出は、私たち夫婦が住んでいる鹿児島に両親が訪ねてきた時のことです。この時父は80歳を過ぎた頃でした。巡った鹿児島の場所には、知覧の特攻平和会館と海上自衛隊鹿屋航空基地資料館がありました。ここには知覧や鹿屋から飛び立った大勢の特攻隊の若者たち一人一人の写真と家族に宛てた最後の手紙・遺書等が展示されています。私は、それらの手紙を読んでいくうちに、圧倒され胸が押しつぶされそうになる感覚をおぼえました。若者たちの一人は最後の手紙に「我らの分まで生きてください」と書いていました。父は何も言わず、多くの特攻隊員の手紙一つ一つにじっくり目を通していたようでした。その時に、父の仕事に対する強い意思とぶれない（内面は分かりませんが）生き方の原点を垣間見たように思いました。父は、この若者たちにあるはずであった後半生分の人生を、自分たちに与えられた賜物として生きてきたのではないか、とふと思ったのです。父に一度だけ、日本が戦争をしたことに対してどう思っているの、と問うた事があります。「負ける戦争はしてはいけない」という返事が返ってきました。

以上、この機会に父を思い出しながら拙文を書かせていただきました。感謝申し上げます。父はいつも家族を一緒に連れて、自分の仕事先の外国を回ってきました。そのお陰で、家族の私たちは、日本にずっといたら出会えなかったであろう人々や色々な経験ができたのではないかと今は思っております。

事務局からのおたより

未だに24時間エアコンが手放せない酷暑厳しい毎日です。異常気象が続く中、未だ震災の復旧復興がままならない能登半島を今度は豪雨が襲いました。23もの河川が相次いで氾濫し、仮設住宅を含む多くの家屋が浸水被害に遭い、安否がわからない方々の捜索が続いています。地震に続いて水害…あまりにも酷い仕打ちです。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早く復旧されますように祈るばかりです。

本日、機関誌31-3号をお届けします。是非ご一読ください。

“May I speak to Dr. Matsumoto?”

佐野のぞみ先生は、初代会長 故松本先生のご長女。小児科のお医者さんです。先生は松本先生が神戸大学在職中、同大学で学ばれました。医学部生として、松本教授の脳外科の講義を受けられたと聞いています。卒業後は松本先生と同じ「神経」を専門とする、小児神経科医の道に進まれました。2021年、国立病院機構南九州病院を定年退職され、現在は鹿児島の病院で非常勤医師として診療を続けておられます。

佐野先生は、ご主人の佐野輝先生（鹿児島大学長・同大学精神機能病学分野教授）に伴って、愛媛、鹿児島の病院に勤務され、神戸にいらっしゃる松本先生には時折お電話で患者さんのことで意見を求めておられたこともありました。

お電話をお繋ぎするとき、「九十九さん、お元気ですか？いつもお世話になってありがとうございます…」と、いつも必ず、私共の様子を気遣ってくださいました。

電話が終わると、松本先生から「のぞみにこれを送ってやってくれますか、参考までにと伝えてください」と、医学書や論文のコピーをお預かりすることがありました。

時の経つのは早いもので、11月、松本先生が亡くなられて7年になります。この機会に「医師としてのお嬢さんからご覧になられた松本先生」を書いて頂けないでしょうかとお願いしました。書き難いテーマであったと思うのですが、「…長嶋先生と九十九さんの親切なご配慮であると受け止めて、父を少し思い出しながらなんとか書いてみました…」とのメッセージと共に原稿を頂戴しました。

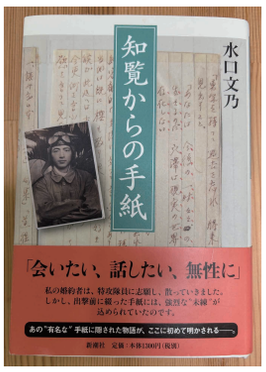
「のぞみはたまにおかしな日本語を使うことがある」と仰る松本先生に、「なにせ、父のおかげで私は5年間の小学校国語教育を受けておりません…」と小気味よい佐野先生。この度、「色々不備な点や変な日本語もあるかもしれません。遠慮なくご指摘、訂正していただけましたらありがたいです」とお気遣いのお言葉も頂戴しました。

松本先生の海軍兵学校時代の写真や解剖ノート、知覧特攻平和会館パンフレットなど、佐野先生が書いてくださった内容に関係のある資料を掲載させていただきました。

松本悟先生の海軍兵学校時代　（偲ぶ会展示）

松本先生の解剖ノート　1963年7月～
ドイツ マックスプランク脳研究所
（偲ぶ会展示）

知覧特攻平和会館パンフレット　一部抜粋



知覧からの手紙
（澤田理事長所蔵）

松本先生との貴重なご家族の思い出を記してくださった佐野先生にあらためまして感謝申し上げます。

二分脊椎ハンドブック

長嶋会長には、いつも偉大な先人に敬意を表するという深い思いがあります。その思いがこの度、形になりました。財団設立30年を記念して二分脊椎ハンドブックの発行を企画し、８月30日に完成しました。解説のみならず図も全て一から会長が書き下ろしたものです。そして公益財団法人神戸やまぶき財団（和田長平理事長）の助成を受けてようやく発行に漕ぎつけることができました。

同ハンドブックは、脊髄髄膜瘤のお子さんを出産されたお母さんが最初に手にされることを想定し、脊髄髄膜瘤に初めて接するご両親やご家族、お子さんを預ける際に病気の説明を要する保育所、幼稚園、学校関係者を対象にしています。その方々が必要とする知識の全体を見渡すことができるよう、最小限に絞った内容にしています。

財団会員でご希望の方には随時お送りさせていただきたいと思っていますが、初版は発行部数を最少にして、各診療科の先生方から装丁も含めて改訂すべきところをアドバイスいただき、さらに良いものにして早急に発行したいと思っています。

なお、ハンドブックに興味をもってくださる方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報いただけましたら幸いです。準備が整い次第お送りさせていただきます。

表紙の写真

神戸港開港を礼砲で祝したイギリスの旗艦、「ロドニー」の模型です。神戸ハーバーランドにある神戸海洋博物館のエントランスホールいっぱいに展示されています。神戸海洋博物館は、幕末1868年の神戸港の開港から120年目にあたる1987年に建設され、海・船・港をテーマとする海事の博物館として神戸港のシンボルになっています。港湾都市としての神戸の歴史、船や港の仕組みや役割、西洋帆船から今日の客船、貨物船、先進技術が投入された船舶の模型が数多く展示されています。

「ロドニー」は1833年にイギリスのベンブロークの造船所で進水した英国海軍の戦艦です。1868年1月1日（慶応3年12月7日）の神戸開港を祝うために「ロドニー」は英国艦船12隻の旗艦として神戸に来航し、世界に向けて21発の祝砲を放ちました。

神戸海洋博物館にある「ロドニー」の模型は実物の１/８くらいの大きさです。一見、普通の帆船のように見えますが、船体の両側に大砲が出ています。軍艦といっても現在のものとは違ってうっとりするような木製のフォルムです。戦艦大和の甲板にはチークが使われていたのに対し、ロドニーはチークよりも軽いモミが使われていたとの記述があるそうです。

いよいよ10月、一年の折り返しです。後半、集中力を欠かさないよう、事務局の仕事を努めさせていただきたいと思います。

九十九 そのえ（9/27）

Brain and Spinal Cord ″B & C″ Vol. 31-3
発行日：2024年9月30日　発行者：長嶋 達也　　編集者：九十九 そのえ

表紙の写真：英国軍艦「ロドニー」模型
神戸海洋博物館

Contents

① 巻頭言　… 長嶋 達也
② “May I speak to Dr. Matsumoto?”
－小児神経科医の娘から見た父・松本 悟－ … 佐野 のぞみ
③ 事務局からのおたより

公益財団法人 日本二分脊椎・水頭症研究振興財団
〒654-0047　神戸市須磨区磯馴町 4-1-6
Tel：078-739-1993　Fax：078-732-7350
E-mail：jsatoshi@xa2.so-net.ne.jp　https://spinabifida-research.com